

八郎瀉周辺の砂丘について (予察)

水 野 裕

〈 序 〉

東北地方の日本海岸には、青森県の十三湖付近から新潟平野までの間に、かなり広い地域にわたって海岸砂丘が発達している。そこで筆者は今回、これら日本海岸沿いの砂丘地の一つである秋田県の八郎瀉付近を取上げ、この砂丘地の地形的な特徴や内部構造、それに砂丘砂の粒度組成等を調査し、砂丘地の区分を行ってみた。

なお、この地域の一部の砂丘については、すでに三浦 (1949)・三位 (1958) (1960) (1965)・藤岡 (1963) (1965) 等の報告がある。

〈 砂 丘 分 布 〉

八郎瀉周辺には、北は八森付近から南は秋田付近まで、延べ約65^{km}にわたって、日本海沿いに細長く砂丘が分布している。この砂丘地は大別して八郎瀉以北の能代砂丘と、以南の秋田砂丘に分けられる。すなわち、前者は男鹿半島北岸の安田より能代を経て八森へ至るものであり、後者は男鹿半島南岸の脇本から南へ二田・追分を経て秋田へ至るものである (Fig.1)。

これら砂丘地は、いずれの場合もほとんど全部が被覆砂丘であり、大部分松林におおわれ、これらは防砂林や防風林の役目を果たしている。

〈 砂 丘 の 高 さ 〉

能代砂丘と秋田砂丘を概観すると、まず最初に云えることは、高位と低位の2つの砂丘が存在することである。高位のものは標高が20~65^mであり、その地表面はかなり開析されてほとんどが松林におおわれている。低位のものは標高20^m以下で、その地表面の開析も植生も微々たるものである。

この高位の砂丘は大部分、その基部に才三紀属の丘陵または才四系の砂礫属を持つことが数ヶ所で確認出来るので、いわゆる“見かけ砂丘” (偽砂丘) と云われるものであり、そのため砂の厚さはそれほど厚くない。秋田市西方の勝平山 (49.4^m) 付近を例にとると、頂上部付近では約30^mであるが、周辺に行くにつれてうすくなり、約5^m位しかない所もある (藤岡1963)。

このような高位な砂丘は、能代砂丘では、八郎瀉北西の五明光部落付近から能代市南部にかけて、また秋田砂丘では、下出戸部落付近から秋田市南西の中村部落付近にかけて存在している。

一方、低位の砂丘は標高20^m以下で、能代砂丘では能代から八森へかけての地域がその主

な所であり、秋田砂丘では八郎瀉南岸の脇本付近から追分付近までと、土崎付近から勝平山西方へかけての地域が該当する。

この低位の砂丘は現海岸線付近に高位の砂丘がない場合に北西風または西風が陸地内部まで影響力をもつので良く発達しており、現海岸線から約4^{km}も内陸へ砂丘が存在している。

この低位砂丘の砂の厚さは凸地で5^m位、平地で10^mを一寸越す程度である。

なお、これら低位の砂丘地のうち、秋田市に一番近い土崎付近では住宅地化や工業用地化が進み、その外側の国鉄船川線沿線では畑地となっており、野菜や果樹を生産すると云う近郊農業的現象がみられる。

〈砂丘の形態〉

次に砂丘の形態についてであるが、八郎瀉周辺の砂丘の細い形態については、すでに三位(1958)がのべているので、ここでは概略についてのべる。

能代砂丘における砂丘の形は、そのRidgeをみると南部においては海岸線に直角にNW—SEに幾条もの配列を示すが、北方に行くにつれて、それはNNE—SSWの方向をとるようになり、団塊状のものも多くなり、割合複雑な形を示している。すなわち、五明光部落付近から浜田部落付近までは、NW—SEの配列を示すが、浜田部落以北ではNNE—SSWの方向となり、浜浅内部落付近から能代市へかけては臥龍山などで代表されるように団塊状の砂丘となっている。

一方、秋田砂丘の形は、能代砂丘のそれとは対称的で、単純にN—SまたはNNW—SSEと海岸線に平行に配列している。すなわち、八郎瀉南岸の二田付近ではほぼ平行に数条の砂丘列がみられるが、これらは追分付近において一本となり、秋田市西方の砂丘地へ連続している。なお、この数条の砂丘列の間にある堤間湿地は水田として利用されている。

〈砂丘砂の粒度組成〉

八郎瀉周辺の砂丘砂の粒度組成を約80ヶ所の地点について調べると、同じ砂丘砂でも大分違いがみられる。

すなわち、分級度の良いことは、いずれの場所でも同じであるが、能代砂丘より秋田砂丘の方が全般的に粒度が大きく、また一般的には高位砂丘の砂は低位砂丘のそれより粗いことが判明した。また、同一砂丘地では海岸線より内陸へ行くにつれて一般に細粒になっているようである(Fig.2)。

〈砂丘地の地区区分〉

以上のように、八郎瀉周辺の砂丘地の地形をみると、色々な特色により、いくつかの地区に区分することが出来る(Fig.3)。

すなわち、代表的な部落名や地名を使用すれば、能代砂丘は落合・浅内・五明光の各砂丘区に、また秋田砂丘は脇本・天王・土崎・勝平山の各砂丘区にそれぞれ細分されると思われる。

なお、これら各砂丘の形成年代や堆積環境等については、地質学的資料や考古学的資料を整理中なので別の機会にゆずりたい。

〈参考文献〉

藤岡一男(1963)：東北地方日本海岸の砂地

秋田地方を例として

東北開発研究 Vol.3 No.4

藤岡一男(1965)：八郎潟の地史

八郎潟の研究(八郎潟総合学術調査会)

藤岡一男・高安泰助(1965)：八郎潟周辺の地質および地形

八郎潟の研究(八郎潟総合学術調査会)

Mii H. (1958) : Coastal sand dune evolution of the

Hachiro-gata, Akita Prefecture.

Saito Hoon Kai Mus.Res.Bull. No.27

三位秀夫(1960)：八郎潟の沖積層

東北大学理科報告(地質学)特別号4巻

三位秀夫(1965)：海岸砂丘の形成について

才四紀研究 Vol.4 No.1

三浦牧男(1949)：秋田県における代表的砂丘の研究

東北地理 Vol.1 No.2

以上

Fig. 1

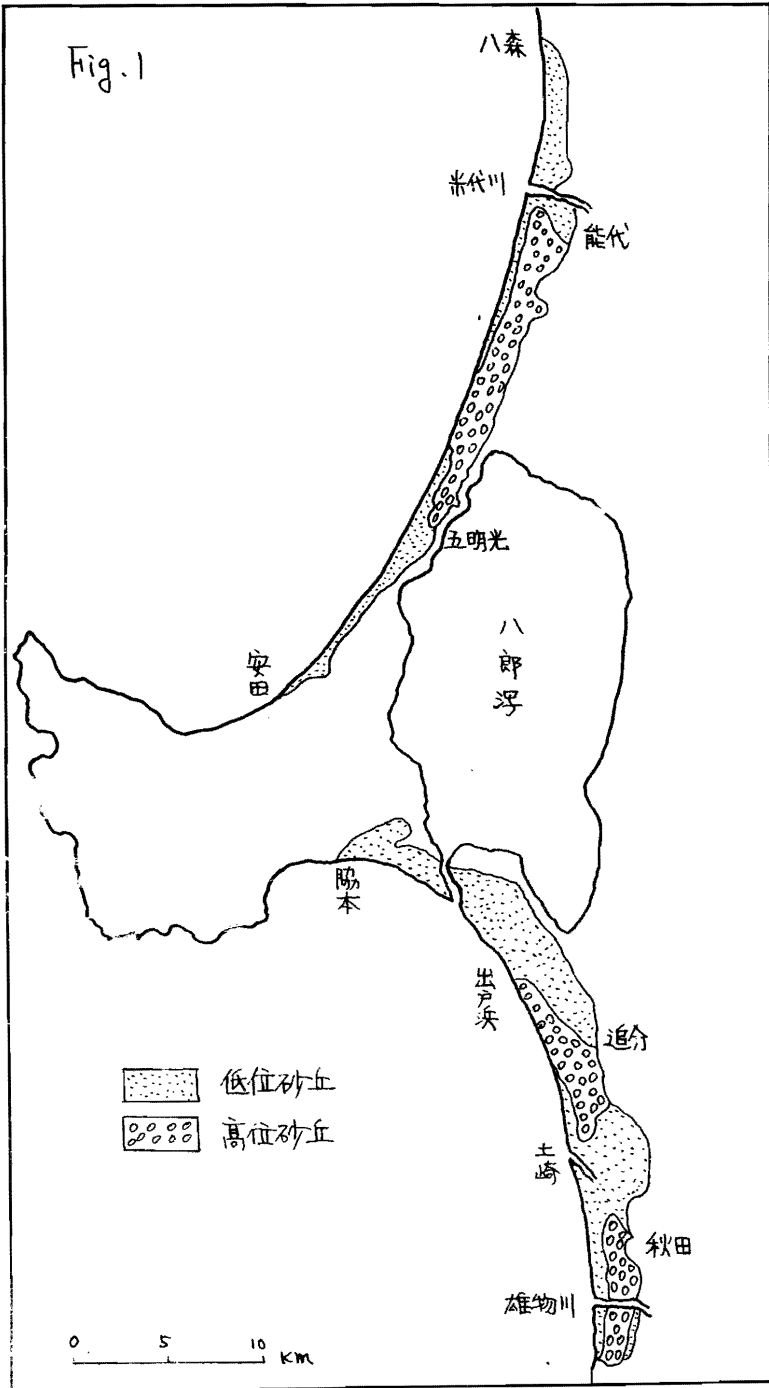


Fig. 2

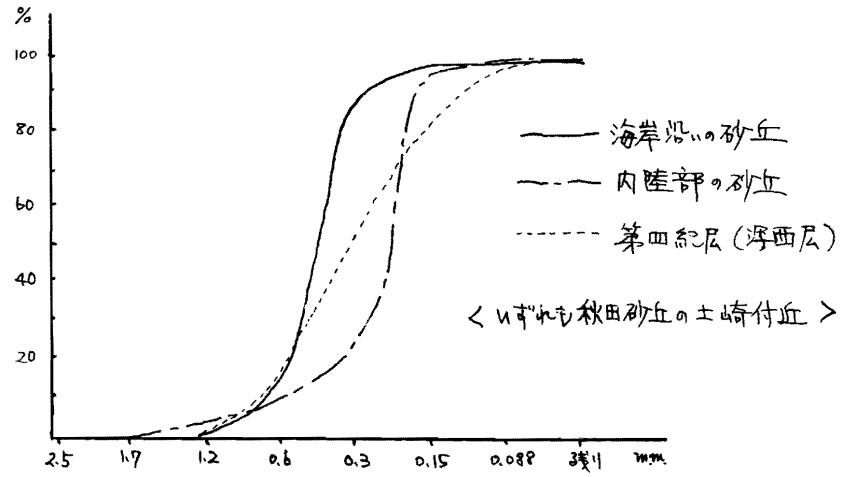
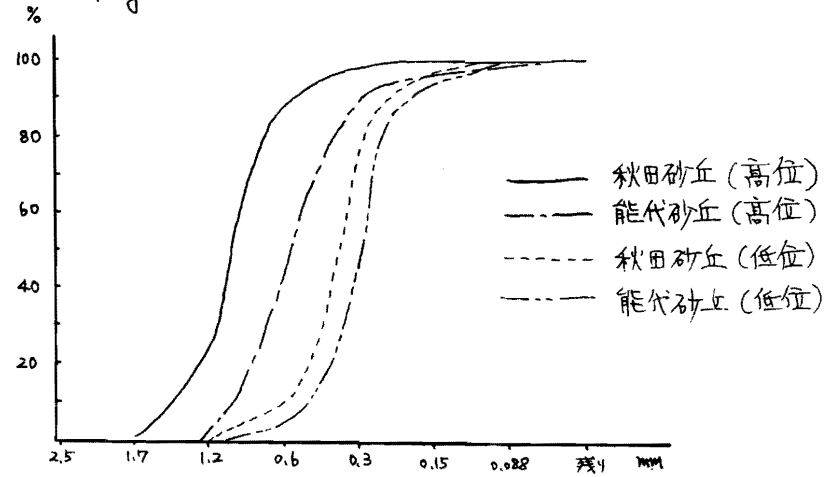


Fig. 3

